

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 矢野秀武

矢野秀武氏の学位請求論文「現代タイにおける仏教運動——社会変動と瞑想実践」は、20世紀のタイ仏教の全体像に照らし合わせつつ、パークナム寺からタンマカーイ寺へと展開していく仏教運動を調査研究し、たくさんの意義深い知見を引き出している。1970年代以降に急速に発展したタンマカーイ寺は、パークナム寺に由来する独自の瞑想法を基軸として高学歴の若者を引き寄せるとともに、広く都市化の影響を受けた人々をまきこんで展開し、1000名近くの常住出家者を抱えるに至っている。本論文はこの注目すべき宗教運動を多面的にとらえ、タイ上座仏教研究や比較宗教運動研究の分野で大きな貢献をなした業績である。

矢野氏はまず、既存のタイ宗教研究を広い視野から検討した上で、運動形成の歴史的な研究に取り組み、資料を丁寧に掘り起こしてタンマカーイ寺の運動を南方仏教史の大きな流れのなかに位置づける。この運動の独自の瞑想やそれと関わる実践は、タイ上座仏教が近代化の過程で統一サンガを構築するなかで、周辺化されていった傍流の伝統をくみ上げて形成されたものであることを示す。そしてその信仰実践を新しい形での「瞑想・修養系の信仰」と「寄進系の信仰」とが合わさったものであると分析する。

続いて矢野氏は、現在のタンマカーイ運動の信仰世界の理解に踏み込んでいく。ここでは長期にわたる参与観察、インタビュー調査、さらに質問紙調査の成果を駆使して、深さと広がりの方において、陰影に富んだ濃密な叙述を行っている。容易ではない宗教集団調査がねばり強く継続され、信仰生活のひだにまで分け入っている。さらに矢野氏はテクノロジーやメディアを多用するこの運動が、消費社会への抵抗の要素を含みつつも、実はそれになじんだ心身を形成するものであると論じる。また、それは主流サンガの「国民的な公共宗教」の枠を脅かさない範囲でグローバル化が進む環境に適応し、「開発僧」などの「市民社会的な公共宗教」とともに新たなタイ仏教のあり方を模索する試みであり、「公共性を帯びた私的宗教」と位置づけられることを論証する。欧米の素材をもとに宗教社会学で論じられてきた世俗化や公共宗教の理論が、タイ仏教の展開を見ることによって検討し直され、従来の研究の偏りの是正が求められる。

フィールドワークによる綿密な調査研究に加えて、思想史宗教史研究、社会科学的な理論的分析が複合され、多面的な考察がなされているが、それぞれの論題についての論証が余すところなく十分とは言えず、もう一步、踏む込みに欠けるところはある。とはいえ、全体的には骨太で重層的な厚みをもった野心的な試みであり、オリジナリティの大きいすぐれた業績である。よって本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと認められる。